

牛頭山初祖法融禪師『心銘』詮釈

石野 幹 昌

はじめに

本稿は中国禪宗第四祖道信大医禪師旁出の法嗣、牛頭山法融禪師が著した『心銘』の訳註である。『心銘』とは、『景德傳燈錄』卷第三十に収録される四言・百九十八句・七百九十二文字から成る詩頌で、衆生本有の心性、即ち仏性を不生不滅・平等一如の境地から謳いあげたものである。

法融は潤州延陵の人で、姓は韋氏。十九歳の時にはその学問は經典・史書に通じ、後に大般若経を閲読し、真空不空の空に暁達した。その後、茅山の^{けい}法師に参じて出家し、三論宗の空思想を学んだ。当時の法融は、法融伝^じに言うように、他を顧ることなくひたすら般若の正觀三昧の日々を送っていたようである。従って、その思想には、泯絶無寄なる三論宗の、徹底した否定の後に真実を見るところという^{あり方}が随所にかいま見られる。法融の空思想の基盤はこの時に形成されつつあったと言ってよいだろう。しかし、この觀心三昧に明け暮れるも、真理を外に求めて未だ主客の相對・対治という^{あり方}から離れきっていなかった彼に、四祖道信は²觀行を否定し、対治・外求を借りない人人本具の仏性を説示して法を付嘱した。本来不生平等なる心性を説くこの『心銘』は、かくして完成されるに到る。道信は衆生本来具足の真心を説いたが、彼の師である三祖僧璨も平等・不二なる信心を説いた。従って、この『心銘』はその語、内容共に僧璨の『信

心銘』と酷似した部分が数多く見られる。僧璨と法融とは時代から見てもさほど離れておらず、思想的にも正伝の法を受け継いでいたことがここからも伺える。本稿は、底本に『景德傳燈錄』卷第三十所収のもの（『大正新脩大藏經』卷第五十一所収）を用い、原文を掲げてそれに訓読文、和訳文、及び注釈を施した。尚、本稿はもともと論考と併せて発表する予定のものであったが、紙数等の関係もあり、論考の部分については次の機会に譲ることとする。

牛頭山初祖法融禪師心銘

心性不生。何須知見。本無一法。誰論熏鍊。往返無端。追尋不見。一切莫作。明寂自現。
 前際如空。知處迷宗。分明照境。隨照冥蒙。一心有滯。諸法不通。去來自爾。胡假推窮。
 生無生相。生照一同。欲得心淨。無心用功。縱橫無照。最爲微妙。知法無知。無知知要。
 將心守靜。猶未離病。生死忘懷。即是本性。至理無詮。非解非纏。靈通應物。常在目前。
 目前無物。無物宛然。不勞智鑒。體自虛玄。念起念滅。前後無別。後念不生。前念自絕。
 三世無物。無心無佛。衆生無心。依無心出。分別凡聖。煩惱轉盛。計校乖常。求真背正。
 雙泯對治。湛然明淨。不須功巧。守嬰兒行。惺惺了知。見網轉彌。寂寂無見。暗室不移。
 惺惺無妄。寂寂明亮。萬象常眞。森羅一相。去來坐立。一切莫執。決定無方。誰爲出入。
 無合無散。不遲不疾。明寂自然。不可言及。心無異心。不斷貪淫。性空自離。任運浮沈。
 非清非濁。非淺非深。本來非古。見在非今。見在無住。見在本心。本來不存。本來即今。
 菩提本有。不須用守。煩惱本無。不須用除。靈知自照。萬法歸如。無歸無受。絕觀忘守。
 四德不生。三身本有。六根對境。分別非識。一心無妄。萬緣調直。心性本齊。同居不携。

無生順物。隨處幽棲。覺由不覺。即覺無覺。得失兩邊。誰論好惡。一切有爲。本無造作。
 知心不心。無病無藥。迷時捨事。悟罷非異。本無可取。今何用棄。謂有魔興。言空象備。
 莫滅凡情。唯教息意。意無心滅。心無行絕。不用證空。自然明徹。滅盡生死。冥心入理。
 開目見相。心隨境起。心處無境。境處無心。將心滅境。彼此由侵。心寂境如。不遣不拘。
 境隨心滅。心隨境無。兩處不生。寂靜虛明。菩提影現。心水常靜。德性如愚。不立親疎。
 寵辱不變。不擇所居。諸緣頓息。一切不憶。永日如夜。永夜如日。外似頑嚚。內心虛眞。
 對境不動。有力大人。無人無見。無見常現。通達一切。未嘗不遍。思惟轉昏。汨亂精魂。
 將心止動。轉止轉奔。萬法無所。唯有一門。不入不出。非靜非喧。聲聞緣覺。智不能論。
 實無一物。妙智獨存。本際虛冲。非心所窮。正覺無覺。眞空不空。三世諸佛。皆乘此宗。
 此宗豪末。沙界含容。一切莫顧。安心無處。無處安心。虛明自露。寂靜不生。放曠縱橫。
 所作無滯。去住皆平。慧日寂寂。定光明明。照無相苑。朗涅槃城。諸緣忘畢。詮神定質。
 不起法座。安眠虛室。樂道恬然。優遊眞實。無爲無得。依無自出。四等六度。同一乘路。
 心若不生。法無差互。知生無生。現前常住。智者方知。非言詮悟。

訓読文

心性は生ぜず。何ぞ知見を須ひん。本と一法も無し。誰か熏鍊を論ぜん。

往返して端無く、追尋するも見ず。一切作すこと莫くんば、明寂、自ら現ず。

前際は空の如きも、知処に宗に迷ふ。分明に境を照らさば、照に随つて冥蒙たり。

一心、滯ること有らば、諸法、通ぜず。去来、自ら爾り。胡ぞ推窮を仮らん。

生に生相無し。生、照は一同なり。心の浄なることを欲得^{ほつ}さば、無心に功を用ひよ。

縦横にして照らすこと無きを、最も微妙と為す。法を知らんも知る無し。知る無ければ要を知る。

心を將て静を守るは、猶ほ未だ病を離れず。生死、忘懷せば、即ち是れ本性なり。

至理は詮すること無く、解に非ず纏に非ず。靈通して物に応じ、常に目前に在り。

目前に物無し。物無ければ宛然たり。智鑒を勞せずして、体、自ら虚玄なり。

念起り念滅するも、前後に別無し。後念生ぜずんば、前念自ら絶ゆ。

三世に物無く、心無く仏無し。衆生は無心なり。無心に依つて出づ。

凡聖を分別せば、煩惱、転た盛んなり。計校すれば常に乖き、真を求むれば正に背く。

双対治を混さば、湛然として明浄なり。功巧を須ひず。嬰兒の行を守る。

惺惺として了知せば、見網、転た彌る。寂寂として見無くんば、暗室にも移らず。

惺惺として妄無くんば、寂寂として明亮なり。万象は常真、森羅は一相なり。

去来坐立、一切執すること莫れ。決定して方無くんば、誰か出入を為さん。

合すること無く散すること無く、遅ならず疾ならず。明寂自然にして、言及すべからず。

心に異心無し。貪淫を断ぜざれ。性、空ならば、自ら離れ、任運に浮沈す。

清に非ず濁に非ず、浅に非ず深に非ず。本来は古に非ず、見在は今に非ず。

見在は住すること無く、見在は本心なり。本来は存せず、本来は即今なり。

菩提は本とより有り。須用^{すべから}く守るべからず。煩惱は本とより無し。須用^{すべから}く除くべからず。

靈知、自ら照らし、万法、如に帰す。帰無く受無く、觀を絶つて守ることを忘る。

四徳、生ぜず、三身、本とより有す。六根、境に対するに、分別するは識に非ず。

一心、妄無くんば、万縁、調直たり。心性は本と斉し。同に居りて携へず。

生ずること無くして物に順ひ、随処に幽棲す。覺は不覺に由る。即覺は覺無し。

得失の両辺、誰か好惡を論ぜん。一切の有為は、本と造作無し。

心の心ならざることを知らば、病無く藥無し。迷ふ時には事を捨つるも、悟り罷らば異なるに非ず。

本と取るべき無し。今、何を用てか棄てん。有と謂はば、魔、興り、空と言ふも、象、備はる。

凡情を滅すること莫れ。唯だ意を息めしむるのみ。意、無ならば、心、滅し、心、無ならば、行、絶す。

空を証することを用ひずんば、自然に明徹なり。生死を滅尽し、心を冥にして理に入る。

目を開きて相を見れば、心、境に随つて起る。心処に境無く、境処に心無し。

心を將て境を滅するは、彼此、由は侵すがごとし。心、寂ならば、境、如たり。遣らず拘らず。

境は心に随つて滅し、心は境に随つて無なり。両処、生ぜず、寂靜にして虚明なり。

菩提、影現し、心水、常に清らかなり。徳性は愚の如く、親疎を立てず。

寵辱にも変ぜず、居る所を択ばず。諸縁、頓に息み、一切憶せず。

永日は夜の如く、永夜は日の如し。外、頑闇に似たるも、内心は虚真なり。

境に対して動ぜざるは、有力の大人なり。人無くんば見無く、見無くんば常に現ず。

一切に通達して、未だ嘗て遍からずんばあらず。思惟すれば転た昏く、精魂を汨乱す。

心を將て動を止むれば、転た止まり転た奔る。万法は所無し。唯だ一門有るのみ。

入らず出でず。静に非ず喧に非ず。声聞・縁覺は、智、論ずること能はず。

実に一物も無し。妙智、独り存するのみ。本際は虚冲にして、心の窮むる所に非ず。

正覺は覺無く、真空は空ならず。三世の諸仏は皆、此の宗に乗ず。

此の宗は豪末なるも、沙界を包容す。一切顧ること莫れ。心を安ずるに処無し。

処として心を安んずること無くんば、虚明、自ら露る。寂静にして生ぜず、放曠にして縦横たり。

所作、滞ること無く、去住、皆平らかなり。慧日、寂寂として、定光、明明たり。

無相の苑を照らし、涅槃の城を朗らかにす。諸縁、忘れ畢つて、神を全ふし質を定む。

法座より起たずして虚室に安眠し、道を楽しむこと恬然として、真実に優遊す。

為すこと無く得ること無く、無に依つて自ら出づ。四等・六度、一乗の路を同じくす。

心若し生ぜずんば、法に差互無し。生の生無きことを知らば、現前に常住す。

智者にして方めて知る、言詮の悟るに非ざることを。

和訳文

③ 心性は生ずることはない。どうして知識見解を用いる必要がある。本来何らの法も無い。誰が（この心性の）薫修練行を論じよう。

（心性は）行ったり来たりして果てしが無く、追い求めていっても見ることはできない。一切の事を為しさえしなければ、明寂（なる境地）が自ずと現前する。

④ 過ぎ去った境界は空と等しいが、（その境界を）知った時に宗旨に迷う。はっきりと対象に心を向けたならば、その心に従って蒙昧となる。

一心に凝滞することが有ったならば、諸々の法は融通しない。（心の）往来というものは、それ自体そのようなものだ。

推尋して窮める必要などはない。

⑤（心が）生ずることに生ずるといふ方はない。生ずることと対象を認識することとは同じものだ（から）。心の清浄なることを求めるのなら、無心に修行せよ。

自由自在であって対象に心を向けることが無いのは、とりわけ、奥深く測り知り難いものである。法を知ろうとしても知りようが無く、知ることが無いからこそ精髓を知る。

心でもって静寂を守ろうとするのは、やはりまだ（空）病から離れてはおらぬ。生死の迷いをすっかりと忘れ去ったならば、それこそが本性だ。

⑥究極の真理（心性）は解説しようが無く、解脱しているのでもなければ纏縛されているのでもない。靈妙に感通して諸物に応じ、常に目の前に在る。

（とはいふものの、）目の前に事物は無い。事物が無いからこそありのままだ。智慧で以って鑑みるまでもなく、それ自体虚靈玄妙だ。

⑦念慮が生じてそれがまた滅しても、前のものと後のものとに違いは無い。後の念慮が（続いて）生じなかったならば、先に生じた念慮は自ら消滅する。

過去・現在・未来に亘って万物は無く、心も無く仏も無い。衆生は（本来）無心である。無心に依って出離する。

凡と聖を思惟分別したならば、煩惱はますます盛んになるばかり。計り較べたならば常にそむき、真理を求めたならば正にそむく。

一つ一つ対当して正すやり方をどちらもなくしてしまったならば、澄んで清らかとなる。修行の巧妙さは必要ない。嬰兒の行を守るのみ。

明らかに認識したならば、見解の網は広がって行くばかり。寂然として見解が無かったならば、暗く誰もいない部屋で

も移り変わりはしない。

明らかに妄念が無かったならば、寂然として清浄だ。森羅万象は永遠なる真如の唯一絶対の姿なのだ。

行くにも来るにも坐るにも立つにも、決して執着してはならぬ。絶えて（心の）趣く所が無かったならば、誰が出たり入ったりしよう。

合一することも散逸することも無く、遅くもなければ速くもない。澄みわたって静寂であり、言葉では言い表し得ない。

(8) 心にはそれ以外の別の心など無い。（だから、）貪欲を断じようとしてはならぬ。心そのものが空であるならば、（貪欲から）自ずと離れ、（あとは）心の行くに任せて浮き沈みするだけだ。

清浄でも穢濁でもなく、浅くもなければ深くもない。(9) 「本来」というのは古のことではなく、「見在」というのは今のことではない。

「見在」はとどまることはなく、「見在」は本来の心である。「本来」は存在せず、「本来」とはこの今現在そのままである。

菩提はもとより具有している。守るには及ばぬ(10)。煩惱はもとより存在しない。除くまでもない。

(11) 靈妙なる智慧が自ら（万物を）照らし出し、全ての法がありのままの状態に復帰する。（しかし、）その帰っていくものもそれを受け入れるものも無い。観察することや守り摂めることをも忘絶する。

(12) （常・楽・我・浄の）四転倒は生ぜず、（仏身・応身・法身の）三身はもとより具わっている。（眼・耳・鼻・舌・身・意の）六根が対象に対した時に、分別するのは識ではない。

(13) 一心に妄念が無かったならば、全ての対象は調和して正直となる。心性は本来平等であり、（差別の万象と）一緒におりながらもそれらを携えて行くことはない。

（それは）生ずることなくして万物に順応し、あらゆる所で人知れず存在している。「覚した」というのは（真に）覚

していないことによって起る。即今ただ今の覺に覺は無い。

得ることと失うことという両極端について、だれがその善し惡しを論じよう。全ての為られたものには本来作すということはない。

(いわゆる) 心が(真の)心でないことを知ったならば、病も無ければ薬も無い。⁽¹⁴⁾ 迷いにある時には万事を放下するが、悟ってしまえば(事物と)異なるものではない。

もとより取り得るものなどない。今、どうして棄てたりしようか。⁽¹⁵⁾ (対境が)「有だ」と言ったならば魔が興起し、

「空だ」と言っても(目の前に)万象は悉く存している。

⁽¹⁶⁾ ありきたりの心情を滅してはならない。ただ意を消滅しさえすればよい。意が無となったならば心が滅し、心が無となったならば(その心の)働きが断絶する。

「空」を悟ろうとしなかったならば、自然に澄み渡る。生死の迷いを滅し尽くし、心に冥符して真理に悟入する。

眼を開けて事物の姿形を見れば、心はその対象に応じて生じる。(だが、)心の方には対象は無く、対象の方には心は無い。

(それなのに、)心でもって対象を滅しようというのは、互いに侵害しあうようなものだ。心が静寂となったならば、対象はありのままとなる。取り除くこともしなければ拘り合うこともしない。

⁽¹⁷⁾ 対象は心に從って滅し、心は(その)対象とともに無となる。(そして、心も対象も)どちらも生じず、静寂で虚明となる。

菩提は姿を現わし、水の如き心は常に静寂だ。性質は愚者のようであり、親しくすることも疎んずることもできない。名誉を得ても恥辱を蒙っても変移せず、居る所を揀択しない。⁽¹⁸⁾ 諸々の対象がたちまち消え失せて、如何なるものを

も記憶しない。

限りなく長い昼は夜に等しく、限りなく長い夜は昼に等しい。外見は愚鈍のようであるが、内心は虚明で真実だ。

対境に対して動揺しないのは力量の有る大人物だ。人が無かったならば見解が無く、見解が無かったならば（真理は）常に現前する。

一切の事物に通達し、遍満して限りない。⁽¹⁹⁾ 思惟分別すればするほどますます昏迷し、精神を昏沈させたり散乱させたりする。

⁽²⁰⁾ 心でもって動き回るものを止めようとしたならば、止まったかと思えばまた奔り出す。全ての法にはそのあるべき所というものは無い。ただ一つの門が有るだけだ。

（しかしながら、）入らず出でず、静かでもなければ騒々しいのでもない。声門・縁覚の智慧では到底論ずることはできない。

実に何らの事物も無い。霊妙なる智慧が独り存るだけだ。真実の境界は空虚冲漠であって、心によって窮められるものではない。

⁽²¹⁾ 「正覚」には覚するということは無く、「真空」は（いわゆる）「空」ではない。三世の諸仏達は誰もがみなこの教えによって悟りを得る。

この教えは極めて微細であるが、世界中を包み容れる。⁽²²⁾ 決して顧てはならぬ。（この世に）心を安んずべき所は無い。どこにも心を安んじなかったならば、虚霊明白なる世界が自ずと顕現する。寂静であって生ずることなく、心が広々として自由自在である。

立ち居振る舞いは凝滞することが無く、行くもとどまるもすべて平等だ。智慧の日ざしと禪定の光明とが寂然として明らかだ。

（そして、）無相涅槃の城苑を明らかに照らし出す。諸々の対象をすっかりと忘れ去って、⁽²³⁾ 精神を全うして本質を定

める。

説法の座より起ち上がることなく何もない部屋で安らかに眠り、ゆったりと道を楽しんで、真実の世界を遊戯する。為すことも無く得ることも無く、(その)無に依って自ら出離する。(慈・悲・喜・捨の)四無量心も、(布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の)六波羅蜜も唯一無二の道に等しい。

(24) 心がもし生じなかったならば、諸々の法が相違うことはない。(心が)生ずることに(本来)生ずるということが無いことを知ったならば、(明寂なる境地が)目の当りに常住する。(これが)言語や文章で悟り得べきものでないことは、智者であってこそ分るのだ。

註

(1) 法融伝 『五燈會元』卷第二 牛頭山法融禪師伝

牛頭山法融禪師なる者は、潤州延陵の人なり。姓は韋氏。年十九にして、学、経史に通ず。尋いで大部般若を閲し、真空に曉達せり。忽ち一日、歎じて曰く、「儒道は世典にして究竟の法に非ず。般若は正観にして出世の舟航なり。」と。遂に茅山に隠れ、師に投じて落髮せり。後、牛頭山の幽棲寺の北巖の石室に入るや、百鳥御花の異有り。

唐の貞観中に、四祖、遙に氣象を觀、彼の山に奇異の人有ることを知れば、乃ち躬自みづから尋訪す。寺僧に問ふに、「此の間に道人有りや否や。」と。曰く、「出家の兒、那箇か是れ道人ならざる。」と。祖曰く、「阿那箇か是れ道人なる。」と。僧対ふる無し。別僧曰く、「此より山中を去ること十里ばかりに、一懶融有り。人を見るも起たず、亦合掌もせず。是れ道人なること莫きや。」と。祖、遂に山に入り、師(法融)の端坐すること自如として、曾て顧る所無きを見る。祖、問ふて曰く、「此に在つて甚麼をか作す。」と。師曰く、「心を觀る。」と。

(2) 四祖道信は 同上書

遂に祖(道信)を引きて庵所に至る。庵を遶るに、唯だ虎狼の類を見るのみ。祖、乃ち両手を挙げて怖勢を作す。師(法融)

曰く、「猶ほ這箇有り。」と。祖曰く、「這箇とは是れ甚麼ぞ。」と。師、語無し。少選^{しばうく}して、祖、却つて師が宴坐する石上に一仏字を書す。師、之を覩て竦然たり。祖曰く、「猶ほ這箇有り。」と。師、未だ悟らざれば、稽首して真要を説かんことを請ふ。(中略)

師(法融)曰く、「心既に具足せば、何者か是れ仏ぞ、何者か是れ心ぞ。」と。祖(道信)曰く、「心に非ずんば仏を問はず、仏を問ふは心ならずんば非ず。」と。師曰く、「既に觀行を作すを許さざれば、境の起る時に於て、心、如何が対治せん。」と。祖曰く、「境縁に好醜無し。好醜は心より起る。心、若し強いて名づけずんば、妄情、何に従りてか起きん。妄情、既に起きずんば、真心、徧く知るに任す。汝、但だ心に随つて自在にして、復た対治すること無ければ、即ち、常住法身、變異有る無しと名づく。吾、璨大師より頓教の法門を受け、今、汝に付す。汝、今諦かに吾が言を受け、只だ此の山に住せ。」と。

(3) 心性は　本詩頌の眼目である心性、即ち、人人本来具足の仏性のあり方について説く。『心銘』では、心は主として、この本来心たる心性と、それが外界の対象に向うことによって起る衆生の分別心・煩惱心とに分けて説かれる。この心性は、生滅の世界を超えた絶対の存在であり、自己の思慮分別によって立てられた見解によって求むべきものではない。「熏鍊」は薰修練行。心を修むべき対象として、それに対して香を焚き染めるように、徐々に影響を与えようと努力し修行すること。本来一法も存在しないのであるから、それに対する修むべき心というものなども無いという意。全篇を通じて、真実のあり方を外に向って求めるのではなく、虚妄なる意念を断絶して内なる本心に復帰することが求められる。

(4) 過ぎ去った境界は　眼前の境界は刹那に生じてはまた刹那に滅していくことを繰り返し、一瞬たりとも留まることはないが、その境界を実なるものとして固定的・観念的にはつきりと捉えてしまうことによって、真実の境界と自己の観念との間に乖離を起こし、それら眼前の諸法の根源たる心性に迷ふこと。「宗」は宗旨。大本、教え根本

(5) 生ずること　心が生起したまさにその時には、心が生起したというあり方など無く、有るのはただその心が対象を認識しているという事実だけであり、従つて、心の清浄を求めるのならば、対象に向うその心の方を無にしなければならないということ。

(6) 究極の真理は　『五燈會元』三祖僧璨伝には次のように言う。

随の開皇十二年壬子の歳に至つて、沙弥道信有り。年始めて十四にして、来りて祖に礼して曰く、「願はくは和尚、慈悲もて解脱の法門を乞与せんことを。」と。祖曰く、「誰か汝を縛する。」と。曰く、「人の縛する無し。」と。祖曰く、「何ぞ更に解脱を求むるや。」と。信、言下に於て大悟せり。

(隨の開皇十二年壬子の歲(592)に、見習僧の道信という者がいた。年は十四になったばかりで、やって来て三祖(僧璨)に礼拝して言うには、「どうか和尚様、慈悲のお心で解脱の法門をお授けになってください。」「解脱」を求められたので、三祖、「誰がおまえを縛っておる。」道信、「誰も縛ってはおりません。」三祖、「ならば、どうしてその上また解脱など求めるのだ。」道信はその言葉がまだ終らぬ間に大悟した。)

また、『信心銘』には、「智者は無為なり。愚人は自ら縛す。」と言う。至極の道理(真心)は言語では表現できず、解脱とか束縛とかいったあり方を超えているということ。

(7) 念慮が生じてゝ 心性は不生であるから、念慮が生じてまた滅しても心性そのものには変わりがあるわけではない。ただ二念を續いで極りがなくなってしまうのを戒しめる。

(8) 心にはゝ 自己の心とは別に、外からやって来る客塵煩惱なるものが有るというのではなく、清浄か染汚であるかどうかは、全てその心のあり方次第である。もし強いてこれを断じようとしたならば、却って「心を將て境を滅する」ことになる。

(9) 「本来」はゝ 「見在」は現在。現在のあり方というものは、「今」という場にそのまま留まることはなく、また、「本来」というのは、「古」からあるものというものでもなければ、「本来あるもの」として存在するでもない。いずれも、「古」・「今」といったあり方を越えた、刹那刹那の本来心そのものを指す。

(10) 「須用」は一必要ゝ。必ずしうしなければならない。ゝする必要がある。

(11) 靈妙なる智慧がゝ 『信心銘』では、「虚明自照、不勞心力。非思量處、識情難測。」(空虚なる光明が自ら(万物を)照らし出し、意識を働かせるまでもない。分別思量を超えたそこは、知識や見解では到底測り難い。)と言う。全ての法が分別思量を超えた真如の世界に復歸することを言う。

(12) 四顛倒是生ぜずゝ 「四等」は四顛倒。無常・苦・無我・不淨であるものを、常・樂・我・淨であると考え誤った見解。

「三身」は、法身―仏の悟りそのもの。報身―菩薩が願と行とに報われて得る仏身。応身―衆生を導く為に相手に応じて現れる仏の身体。「六根對境、分別非識」とは、眼・耳・鼻・舌・身・意という六つの感覚器官が、色・声・香・味・触・法という六つの対象と合して、見・聞・嗅・味・触・知という六つの識別作用を生ずるのであるが、それら識別されたものが「実には有る」と妄分別するのは真の識ではないということ。明鏡が事物を映し出して何の碍げも無いように、あるがままの境地であることを言う。

(13) 一心に妄念がゝ 『信心銘』では、「契心平等、所作俱息。狐疑盡淨、正心調直」(心に契合して平等となったならば、はか

らしいの心は全て消え失せる。狐のような疑いはすっかりとなくなり、正しい心が調って正直となる。」と言う。

- (14) 迷いにある時は、主客・相対の迷いの最中にある時は全ての事物が煩惱のもととなるが、一たび悟ったならば、全ては自己の心性と異なるものではないということ。

- (15) 「有だ」と言ったならば、対境が「有」だと言ったならば事物を実に存在するものと認めてしまい、もとより不可であるが、それでは、それを「空」だと言っても、それでもやはり諸々の事物は現に目の前に悉く備っている。取るべきものも捨てるべきものも無い対境に対して、それを「有」だ「空」だなどと認めて執着してしまっただけなら、ならないと言う。

- (16) ありきたりの、この凡夫の心がそのまま仏の心であるから、それを強いて滅する必要は無い。そうではなく、凡情を煩惱へと導き、常に動き回って止まない意念の方を滅しさえすればよい、の意。『五燈會元』菩提達磨の章の「少林別記」には次のように言う。

別記に云く、「祖（達磨）、初め少林寺に居ること九年、二祖（慧可）の為に法を説くに、祇だ、外、諸縁を息め、内、心に喘ぐこと無く、心、牆壁の如くして、以て道に入るべし、と教ふ。慧可、種種に心性を説くも、曾て未だ理に契はず。祖、祇だ其の非を遮するのみにして、為に無念の心体を説かず。可、忽ち曰く、「我、已に諸縁を息めり。」祖曰く、「断滅を成じ去ること莫きや否や。」可曰く、「断滅を成ぜず。」祖曰く、「此れは是れ諸仏の伝ふる所の心体なり。更に疑ふこと勿れ。」

- (17) 対象は心に、『信心銘』では、「能随境滅、境逐能沈。境由能境、能由境能。欲知兩段、元是一空。」（能縁（対象）を捉える心の働き）は対境とともに滅し、対境は能縁を逐って沈没する。「対境」というのは、（それを把握する）能縁があるからこそ対境として成り立ち、「能縁」というのは、（その主観を作用させるべき）対境が有るからこそ能縁として存在する。（能縁と対境との）二つのものを知りたいのなら、（それらは）本来唯一無二の空である。」と言う。主観と客観とが共に存在しない、寂靜無相なる空の境地が現前することが説かれる。

- (18) 諸々の対象が、『信心銘』では、「一切不留、無可記憶」（如何なる物も後に残らず、記憶すべきものも無い。）と言う。諸々の縁とすべき対象がたちまち消滅し、何ら記憶すべき物が無いこと。

- (19) 思惟分別すれば、『信心銘』では、「迷生寂亂、悟無好惡」（迷ったならば寂滅と散乱（という両極端）を引き起こすが、悟ったならば善し悪し（という揀択・相対）はなくなる。）と言う。事物を分別判断して思惟すればするほど、いっそう寂滅とか散乱とかいう状態を引き起こし、本来の心のあり方からかけ離れてしまうということ。

- (20) 心でもって、『信心銘』では、「止動帰止、止更彌動」（動いているものを止めて静止の状態に戻そうとしても、止まった

かと思えばまたますます動いて行ってしまう。」と言う。動き回っているものを心でもって強いて止めようとするのではなく、それを追いかけて行く心の方を熄滅させるということ。「一門」は、外界の対象がそこから入り、また出て行く門、即ち、外境を捉え、認識する一心のこと。

- (21) 「正覚」には「正覚」(sambodhi 仏の悟り)には何かを覚えたというあり方は無く、「真空」(空 眞実の空。一切を空だとするその「空」もまた空であること。)はいわゆる「空」ではない。「三世諸佛、皆乘此宗」については、『信心名』では、「不二皆同、無不包容。十方智者、皆入此宗。」「不二」であるならば全てが平等だ。何も包み込まれぬものは無い。世界中の智者は誰もが皆この宗旨に入る。」と言う。

- (22) 決して願ては「安心無處」については、『續高僧傳』卷第十六 菩提達摩伝には次のように言う。

三には無所求行と名づく。世人は長く迷ふて処処に貪著す。之を名づけて求と為す。道士は眞を悟り、理として俗と反す。心を安んじて為すこと無くんば、形、運るに随つて転ず。三界は皆苦なり。誰か安きを得ん。經に曰く、「求むること有るは皆苦なり。求むること無きは乃ち樂なり。」と。(世の人々は長い間に亘つて迷い、至る所で貪著の念を起こしている。これを「求」と言う。道を修める者は眞實を悟り、道理に従つて世俗と異つた生き方をする。心を落ち着けてしまつて平穩無事で何もしなかったならば、身体は時の運るに従つて移ろい変わっていくだけだ。この全世界は全て「苦」だ。(そこで)何者が安樂を得よう。經典には言う、『求めることが有るのは全て苦だ。求めることが無いことこそが(眞の)樂なのだ。』と。)

- (23) 精神を「もと」詮神定質。宋版高麗本『景德傳燈錄』(東吳・釋道原著)の「全神定質」に依つて解す。

- (24) 心がもし「冒頭の「一心有滞、諸法不通」、及び「一心無妄、万縁調直」を再び言い換えて本詩頌を締め括る。『信心銘』では、「一心不生、万法無咎」(些かの分別心も生じなかったならば、全ての法に咎は無くなる。)、また、「言語道断、非去来今」(言語という手段は断絶し、過去・未来・現在(といったあり方)を超えている。)と言う。